

【修士論文要旨】

スリランカ・インドタミル人女性における教育問題

A.L ウィーラワルナ*

スリランカの正式国名はスリランカ民主社会主義共和国 ශ්‍රී ලංකා ප්‍රජාතාන්ත්‍රික සමාජවාදී ජනරජය、**இலங்கை** であり、南アジアの島国である。スリランカは英国の植民地支配の初期からセイロンとして知られるようになった。政治的独立を得るために、20世紀初めに国家主義政治運動が起こった。スリランカは1972年にイギリスから完全に独立し、国名をセイロンからスリランカ (Sri Lanka) に変えた。スリランカでは1980年代から内戦が始まり、2009年スリランカ軍がタミル・エラム (LTTE) の解放トラを破って30年間の内戦が完全に終わった。スリランカは、世界で58番目に人口の多い国であり、2017年のデータによると22,409,381人である。年間人口増は1.14%で、多民族の国である。シンハラ人はスリランカで最も多い民族で74.8%を占める。スリランカ・タミル人は、南インドのタミルナドゥ州から12～13世紀にかけて島の北部に定住し王国をつくったタミル人であり、スリランカで2番目に大きな民族として11.2%である。その他、スリランカ・ムーアまたスリランカ・ムスリム (Srilankan Muslims) は9.2%である。スリランカ・ムーア人は8世紀から世界回ったアラブ商人の中でスリランカに定住した人々の子孫である。次に、インド・タミル人が4.2%で、彼らは前に述べたタミルナドゥ州から18世紀の後半から19世紀前半にかけてイギリス植民地農園で働くために英国の植民者によって集められたタミル人労働者である。バーガー (Burgher) はヨーロッパ人との混血の民族であり0.5%である。さらにスリランカに居住する先住民族であると信じられているウェッダ (Vedda) 族の人口は0.3%である。

スリランカは1815年からイギリスの植民地になり、より大きく変わってきた。1815年、イギリス人がスリランカの国王を退位させスリランカの王の時代を終わらせた。しかし、1818年の反乱が起き、また反乱が起きないようにスリランカの中央山地を経済的に開発し始めた。その結果スリランカにコーヒーを紹介、その次に紅茶を紹介しスリランカは世界的な有名な Ceylon Tea を作る産業を始め、現在もセイロンティは紅茶輸出国の中で3番目となっている。シンハラ人がイギリス人の下で働くことを拒んだため、シンハラ人の代わりに安い賃金で働くインド・タミル人を南・インドから雇うことになった。しかし、彼らは南・インドに帰らずスリランカに住み始めた。植民地時代はインドとスリランカは同じイギリスの植民地になっていたため、市民について問題はなかった。しかし、インドは1947年、スリランカは1948年イギリスから独立することに

*国際人間学研究科国際関係学専攻 博士前期課程

なった。そこからインド・タミル人の市民権の問題が生まれ、1948年から1988年の間に、大勢のインド・タミル人はインドに帰国して、残った約17万人に市民権を与えて、2003年には1964年から住んでいるインド・タミル人全員に国籍を与えた。そして、スリランカ中央政府も2003年から、インド・タミル人に無償で勉強ができるエステート部学校を全国的にはじめた。

スリランカの無償教育はスリランカを学歴社会にし、O/L試験とA/L試験の合格者はより良い給料の仕事がすることができるようになった。スリランカの識字率が約90%以上になっていて、スリランカでは多数はシンハラ人でシンハラ人の場合は男女平等で学校へ通うことができる。しかし、スリランカの経済の重要な役割をしているインド・タミル人女性が教育を受けることができる状況は限られていることが聞き取り調査より分かった。これにより、エステート部の貧困を増えていることが分かった。ナンペリアル・エステートでは義務教育終了していた女性の家は貧困線を越えていて、義務教育終了していない女性の家族が貧困線の下であった。地理的な理由で学校が遠いため通うお金がなく教育を続けられなかった女性は約80%以上であった。自費で学校に通わないといけないという理由で教育を続けられなかったことが分かった。また、エステート部にあるウィウェーガナンダ小学校では7年生までしかない。1ヵ月の収入は貧困線の下にあるインド・タミル人の家族で男性にだけ教育が必要であり、女性は茶摘みを習い、家事を手伝い、幼い兄弟の世話をする女性が80%がいた。スリランカのエステート部地域に住んでいる女性はヒンズー教で、ヒンドゥー教により、女性の役割は夫の世話をし、家族を支えることであると大勢のインド・タミル人女性が信じていた。ライン・ルームで住んでいる彼女たちは経済的に、社会的に、文化的に様々な問題に巻き込まれていて貧困状況から抜け出せない家族が多い。今回、女性教育と貧困のかかわりを調べるため義務教育を終了した女性6人と義務教育を終了していない女性10人を対象に、2018年08月17日から2018年08月23日の間に、スリランカのエステート部地域のサバラガムワ州、ラトナプラ県、バラングダ市、ナンペリアル・エステートで聞き取り調査を行った。義務教育を終了していた女性は茶を摘む仕事ではなく、エステート部の外で働いていた。彼女たちの家族の1ヵ月の収入はスリランカ貧困線を上回った。義務教育を終了していない女性はエステートで茶を摘むまたは無職であった。義務教育を終了していない女性の家族の全員は貧困状況であった。この義務教育を終了した女性と義務教育を終了していない女性を例として上げ、教育を続けていない理由を調べた。解決方法を提案したら、これから勉強が始める女兒は努力するだろうと考えた。

そのため、インド・タミル人女性に教育を続けられるように計画を立てる必要がある。そのため、インド・タミル人女性だけではインド・タミル人男性の協力が必要である。女性教育レベルが高くなることで貧困状況にはならないことが明らかになった。そして、政府、私立の様々な組織からの支援、説明会、ワークショップまたはカウンセリングなどについての情報をインド・タミル人女性に提供し、コーディネートし、教えることによって、インド・タミル人女性に教育を

受けさせることができる。

今後、インド・タミル人女性への教育問題を解決できる様々な解決策を検討し、実践することが求められているのである。スリランカ経済に重要な役割をしているインド・タミル人女性は生活のため必死に協力している。しかし、スリランカ一般社会では彼らのカーストが低い、スリランカの人間ではないと差別がまだ続いている。彼女たちの茶を摘んでいる重要な仕事でスリランカは紅茶業界で有名なセイロンティの名前を持ち続けてきていることができ、彼女たちは英雄でもあることを理解すべきである。この論文を通して、インド・タミル人たちの教育の成功だけではなく、同じ女性として泣きたいとき一緒に泣き、叫びたいときに大きい声で叫び、女性の優しさ、気持ち、心構えをきちんと周りに伝えられるような精神的にも、肉体的にも強い女性に育てるために、将来インド・タミル人女性への教育をもっと充実させていくべきであると思った。そして、彼女たちには子供と一緒に幸せに暮らせるように周りからただの同情ではなく、社会的支援、仕事の安定化、安全を提供し、インド・タミル人女性も同じスリランカの女性のように自由に勉強ができる女性になってほしいと願った。同じスリランカでも貧困という理由で勉強できない女性が大勢いることが分かり、日本は幸せと感じた。スリランカ人皆でインド・タミル人女性の教育のため支援すれば、彼女たちが現在持っている力、弱点、成功のチャンス、チャレンジなどを認識できる能力がレベルアップし、彼女たちが自分自身を高めるようになり、役に立つ人材になると考えられる。